# 京都市内遺跡発掘調査報告

平成18年度

2007年３月

京　都　市　文　化　市　民　局

# ご あ い さ つ

京都市は，平安建都から千二百有余年，永い歴史の積み重ねによって日本の文化を醸成し，その結晶である文化財を数多く保有しています。その一つである埋蔵文化財包蔵地もまた市内には多数存在し，古代から近世まで時代ごとに積み重なった遺跡は，わが国の歴史や文化を教えてくれる国民共有の貴重な財産であり，将来にわたって日本文化を発信していくうえでその基礎を成すものです。

本市では，現代に生きる私たちの生活の向上を図りつつ，先人が残した貴重な埋蔵文化財を後世に伝える責務があると考え，「保存」と「開発」の調和を図りながら，埋蔵文化財の保護に取り組んでいます。

この度，平成１８年度に本市が文化庁の国庫補助を得て実施した埋蔵文化財調査に関する結果報告書を作成致しました。この報告書が京都の歴史と文化財への理解を深めるために広く御活用いただければ幸いに存じます。

結びに，各調査の実施に当たり，御理解，御協力を賜りました市民の皆様と，御指導を賜りました関係機関の皆様に深く御礼申し上げます。

平成１９年３月

文化市民局長　　福　徳　久　雄

# 例　言

1　本書は、京都市文化市民局が財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託して実施した文化庁国庫補助事業による平成18年度の京都市内遺跡発掘調査報告である。

2　調査地は、下記のとおりである。

| | | |
|---|---|---|
| Ⅰ | 平安宮朝堂院跡 | 上京区下立売通千本東入下る中務町491-55、竹屋町通千本東入主税町1145-1 |
| Ⅱ | 北白川廃寺跡 | 左京区北白川上別当町26-1 |
| Ⅲ | 鳥羽離宮跡151次調査 | 伏見区中島秋ノ山町78 |
| Ⅳ | 山科本願寺南殿跡 | 山科区伊勢宿町26-6 |

3　本書の執筆分担は、下記のとおりである。

Ⅰ　吉崎　伸

Ⅱ　丸川義広

Ⅲ　菅田　薫

Ⅳ　平田　泰

4　整理作業および本書の作成には、上記の執筆者のほかに以下の者が参加した。
出水みゆき（遺物彩色）、村上　勉（遺物復元）、竜子正彦（保存処理）

5　本書に使用した写真の撮影は、主に村井伸也・幸明綾子が担当し、遺構の一部は現場担当者が行った。

6　本書で使用した土壌名は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修の『新版標準土色帖』に準じた。

7　測量基準点は、京都市遺跡発掘調査基準点を使用した。調査における測量基準点の設置は宮原健吾が行った。本書中で使用した方位および座標の数値は、世界測地系　平面直角座標系Ⅵによる。また、標高はT.P.（東京湾平均海面高度）による。

8　本書で使用した地図は、京都市長の承認を得て同市発行の京都市都市計画基本図「聚楽廻」「田中」「城南宮」「山科」を調整したものである。

9　本書の編集は、児玉光世が行った。

# 本 文 目 次

Ⅰ　平安宮朝堂院跡

1．調査経過 …… 1
2．遺　　構 …… 2
3．遺　　物 …… 3
4．ま と め …… 3

Ⅱ　北白川廃寺跡

1．調査経過 …… 5
（1）調査経過 …… 5
（2）位置と環境 …… 6
（3）周辺の調査 …… 9
2．遺　　構 …… 9
（1）基本層序 …… 9
（2）遺構 …… 12
3．遺　　物 …… 12
（1）縄文土器・弥生土器 …… 13
（2）飛鳥時代後半期の土器 …… 13
（3）瓦類 …… 14
（4）鉄滓 …… 15
4．ま と め …… 15

Ⅲ　鳥羽離宮跡151次調査

1．調査経過 …… 17
2．遺　　構 …… 19
（1）基本層序 …… 19
（2）遺構 …… 20
3．遺　　物 …… 21
4．ま と め …… 21

Ⅳ　山科本願寺南殿跡

1．調査経過 …… 22
（1）調査の経緯 …… 22

（2）位置と環境 …… 23
（3）既往の調査 …… 24
2．遺　構 …… 25
（1）基本層序 …… 25
（2）検出遺構 …… 28
3．遺　物 …… 29
（1）遺物の概要 …… 29
（2）出土遺物 …… 29
4．まとめ …… 30

報告書抄録 …… 31

# 図版目次

図版1　平安宮朝堂院跡　遺構　1　調査区全景（北から）
2　SX4検出状況（南東から）
3　砂礫層除去後の状況（北から）
図版2　北白川廃寺跡　遺構　1　全景（北から）
2　D－D'断面（北東から）
3　C－C'断面（北東から）
図版3　北白川廃寺跡　遺物　1　土器
2　瓦
3　土師器（暗文入）
4　縄文土器・弥生土器
5　鉄滓
図版4　鳥羽離宮跡151次調査　遺構　1　第1面全景（北東から）
2　第2面全景（南西から）
図版5　山科本願寺南殿跡　遺構　1　第1面全景（北西から）
2　第2面全景（北西から）
図版6　山科本願寺南殿跡　遺構　1　建物跡（北西から）
2　土壙SK16（南から）

# 挿 図 目 次


図1　調査位置図（1：2,500）…… 1
図2　調査区配置図（1：300）…… 2
図3　遺構平面図（1：150）…… 2
図4　西壁断面図（1：150）…… 2
図5　緑釉瓦 …… 3
図6　回廊復元図（1：300）…… 4
図7　調査前全景 …… 4
図8　作業風景 …… 4
図9　調査区配置図（1：200）…… 5
図10　調査前全景（北から）…… 5
図11　作業風景（南から）…… 5
図12　昭和初め頃の調査地とその周辺（1：5,000）…… 6
図13　周辺調査位置図（1：2,500）…… 7
図14　調査区断面図（1：80）…… 10
図15　遺構実測図（1：80）…… 11
図16　弥生土器拓影・実測図（1：2）…… 13
図17　土器実測図（1：4）…… 13
図18　軒平瓦・平瓦拓影・実測図（1：4）…… 14
図19　調査地と活断層の位置 …… 15
図20　鳥羽離宮跡推定図（1：10,000）…… 17
図21　調査位置図（1：2,500）…… 18
図22　調査区配置図（1：300）…… 18
図23　調査前全景 …… 18
図24　作業風景 …… 18
図25　第1面遺構平面図（1：100）…… 19
図26　北壁・西壁断面図（1：80）…… 20
図27　基壇建物と今回の調査地（1：500）…… 21
図28　調査位置図（1：2,500）…… 22
図29　調査区配置図（1：200）…… 23
図30　調査前全景（北西から）…… 24
図31　作業風景（西から）…… 24
図32　基本層位図（1：40）…… 25

図33　第１面遺構平面図（１：100）…… 26
図34　第２面遺構平面図（１：100）…… 27
図35　土壙SK16実測図（１：20）…… 28
図36　出土遺物…… 29

# 表　目　次

表１　遺構概要表…… 3
表２　遺物概要表…… 3
表３　周辺調査地点一覧表…… 8
表４　遺構概要表…… 12
表５　遺物概要表…… 14
表６　遺物概要表…… 20
表７　遺物概要表…… 29

# Ⅰ　平安宮朝堂院跡

## 1．調査経過

調査地は、京都市上京区下立売通千本東入下る中務町491-55、および上京区竹屋町通千本東入主税町1145-1である。当地は平安宮朝堂院跡にあたり、大極殿の東側に付属する蒼龍楼とそこから東へ延びる北面回廊部分に相当する。調査区から一軒おいた東側では、平成2年度の調査で回廊の北東コーナー部を検出しており、このことからも関連する遺構が遺存していることが期待された。

調査では地表下約0.6mで黄褐色粘質土（いわゆる聚楽土）を検出した。その上に締まりのない褐色砂礫層が0.2～0.4mの厚さで堆積していることを重機掘削中に認めたが、その時点では砂礫層の時期判定ができなかった。そのため、調査区西半にこの砂礫層を残し、東半は黄褐色粘質土の上面まで掘り下げ、調査を進めながら検討することとした。そして、調査区北部を拡張した時点で、砂礫層の上面から切り込む溝状遺構を検出した。この遺構を回廊の基壇化粧に関連する遺構と判断した。したがって砂礫層は回廊関連遺構の基盤をなしていると理解し、無遺物であることから地山であると判断するに至った。その他、調査区の南部で江戸時代の土壙などを検出し、記録作業を行った後、調査を終了した。

なお、この調査は平成17年度の国庫補助事業による平安宮跡の調査である。

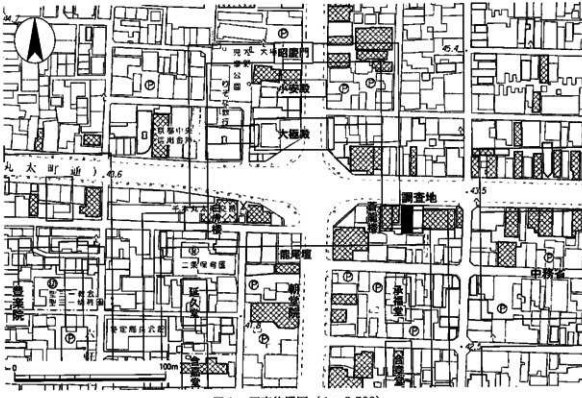



図1　調査位置図（1：2,500）

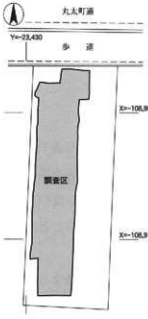



図２　調査区配置図（１：300）

## ２．遺　構

調査区の基本層序は上から近・現代の整地層が約10～15cm、近世の整地層である暗褐色砂泥層が調査区の北側で10～20cm、南側で10～50cm、同じく黒褐色砂泥層が部分的に５～10cmある。その下に締まりのない褐色砂礫層（部分的に微砂層）が30～50cmあり、前述したとおり自然堆積層であると判断している。さらにその下がこの周辺一帯に広く分布する黄褐色粘質土（いわゆる聚楽土）である。

遺構は平安時代と江戸時代のものがあり、いずれも、褐色砂礫層の上面で検出した。

平安時代の遺構は調査区北側の拡張区で検出した溝状遺構(SX４)である。この遺構は南側の肩部のみが残存し、北側は現代の攪乱で壊されている。埋土は黄褐色粘質土で、水の流れた痕跡は認められない。その位置は大極殿北回廊の北端にあたるが、埋土などの状況から雨落ち溝ではなく、基壇化粧に伴う掘形の一部とみられる。

調査区の南部では、砂礫層上面が落込む箇所を壁面でみつけ、一部拡張して落ちのラインが東西方向へ延びることを確認した(SX５)。調査区北部の溝状遺構(SX４）からこの落込み（SX５）までの距離は約12mである。これはこれまでに確認している朝堂院回廊の幅とほぼ等しい値で、砂礫層の高まりが基壇の形状を残しているものと理解している。

江戸時代の遺構は土壙２基（SK２・３）を調査区の南端で検出した。内部からは、土器類や瓦などが出土しており、民家の敷地の奥に掘られたゴミ捨て穴であろうと思われる。

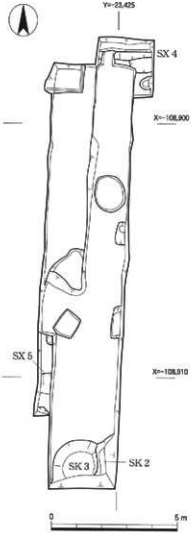



図３　遺構平面図（１：150）

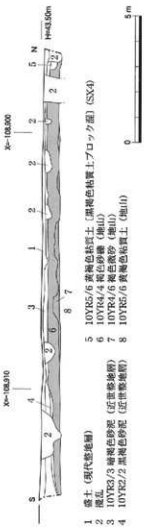



図４　西壁断面図（１：150）

## 3．遺　　物

今回の調査では平安時代と江戸時代の遺物が出土したが、その大半は近世の遺物包含層や江戸時代の土壙からのもので、遺物量も少ない。

平安時代の遺物は土器類と瓦類が出土しているが量は少ない。土器類は土師器と須恵器の破片が、瓦類は丸瓦と平瓦が出土している。また、瓦には緑釉を施釉したものが認められ、全て丸瓦である（図５）。

江戸時代の遺物は土師器・染付磁器・施釉陶器・焼締陶器などの土器類が調査区南部で検出した土壙から出土している。

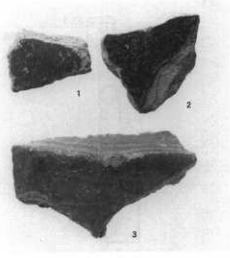



図５　緑釉瓦

## 4．ま と め

今回の調査では、黄褐色粘質土（聚楽土）の上に堆積した砂礫層の上面で平安時代の遺構を確認した意義は大きい。これによって平安宮跡内の一部には、こうした砂礫層が基盤（地山）として存在していることがわかった。今後周辺での調査には注意が必要であろう。

調査区北部で検出した溝状遺構は、基壇化粧の掘形の一部と考え、回廊の北端を示す遺構であると判断している。これを調査区東側の平成２年度調査[1]の成果と比較すると、回廊北側の雨落ち溝（SD10）に先行する土壙ないし溝状遺構（SK35）の延長に当たる。報告では遺構の性格は不明としているが、これが今回のものと同じく基壇化粧の掘形とするならば、一時期ここに基壇の北端が存在していた可能性がある。この点については、今後、資料の蓄積を待ってからの検討課題としたい。

表１　遺構概要表

| 時　代 | 遺　　構 | 備　　考 |
|---|---|---|
| 平安時代 | 溝状遺構（SX４）、落込み（SX５） | 回廊基壇に伴う遺構か |
| 江戸時代 | 土壙（SK２・３） | ゴミ捨て穴 |

表２　遺物概要表

| 時　代 | 内　容 | コンテナ箱数 | Aランク点数 | Bランク箱数 | Cランク箱数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平安時代 | 土師器、須恵器、瓦 | ２箱 | 緑釉丸瓦３点 | ０箱 | １箱 |
| 江戸時代 | 土師器、染付磁器、施釉陶器、焼締陶器 | １箱 | | ０箱 | １箱 |
| 合　計 | | ３箱 | ３点（１箱） | ０箱 | ２箱 |

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より１箱多くなっている。

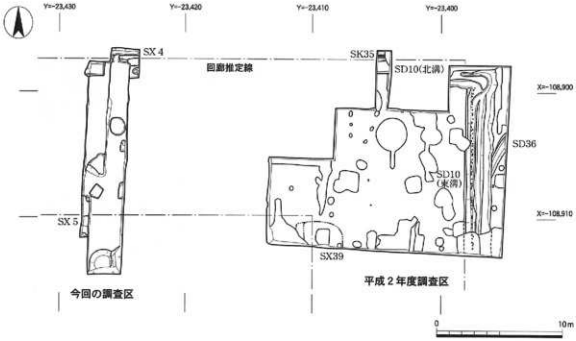



図６　回廊復元図（１：300）

また、今回、回廊と推定される部分だけ地山の砂礫層が盛り上がっていることが確認できた。地山を成形しその上に基壇を構築した際の名残であるとみられる。このことから回廊基壇には掘り込み地業が施されていない可能性が高いと考えられる。平安宮内では豊楽院の正殿である豊楽殿でも基壇下部に掘り込み地業が認められず、整地された地表面から直接に版築で基壇を盛り上げ、基壇化粧の石材を据える部分だけが溝状に掘り込まれていることが確認されている。[2] 今回調査区北部で検出した溝状遺構（SX４）はこうした造作の痕跡であると考えられ、平安宮造営の土木技術の一端がうかがえる資料と言える。

註

1）「平安宮朝堂院（HQ25）」『京都市内遺跡試掘立会調査概報　平成２年度』 京都市文化観光局 1991年

2）「豊楽院跡」『平安宮Ⅰ』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第13冊　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1995年

図７　調査前全景

図８　作業風景

# Ⅱ　北白川廃寺跡

## 1．調査経過

### （1）調査経過

京都市左京区北白川上別当町26-1に邸宅・共同住宅が新築されることになった。北側には北白川廃寺跡（遺跡地図の左京区397）が知られており、調査地はその南端付近に該当する。また南側の北白川小学校内では、飛鳥時代の集落遺跡が調査されている（「小倉町別当町遺跡」、同400-2）。さらに本調査地の東約15mでは、焼土を含む土壙が１基検出されており[1]、上記遺構の広がりを確認する目的で調査を実施した。

調査は2006年６月19日から開始した。調査地は道路側との間に段差があり、敷地側が0.7m程高くなっていた。このため、入口部分の擁壁を壊し、段差をなくすことから始めた。この工事の段階で、地山面（図14の13上面）を確認し、東壁付近での層序が予測できた。

重機掘削は奥（南）側から開始した。敷地全面を調査範囲としたため、排土は２tトラックで排出する方法を採用し、トラックを敷地内に進入させ、直接積み込んだ。東壁付近では地山面を検出したが、中央から西半分では一段低い地形が広がることが判明した。この段状の遺構は、底が深いことが予想できたため、南端より３m分は調査範囲外とし、事務所・資材置場として使用した。

東半では地山上面で小規模な穴を30基ほど検出した。

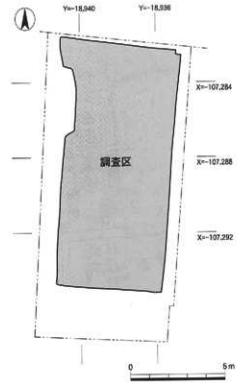


図９　調査区配置図（１：200）

図10　調査前全景（北から）

図11　作業風景（南から）

いずれも不定型な落込みで、柱穴としての特徴もみられなかった。中央から西側に広がる落込みについては、ボーリングステッキによっても底が確認できず、調査面積が狭いこと、掘削に伴う土量が多いことなどから、一段掘り下げた状態で止め、全景写真を撮影した。その後、東西方向に断ち割りし、層序の確認ならびに遺物の採取に努め、断面図作成後、現場での作業を終了した。

## （2）位置と環境

調査地は京都盆地の東を限る山地の西斜面に位置する。調査地の西側は花折断層、東側は鹿ヶ谷断層が走り、東側が隆起した結果、西に下る台地状の地形となった。一方、北側には瓜生山が西方に張り出すため、北と東には山塊が迫まる。西方と南方に開けた地形が今回の調査である。

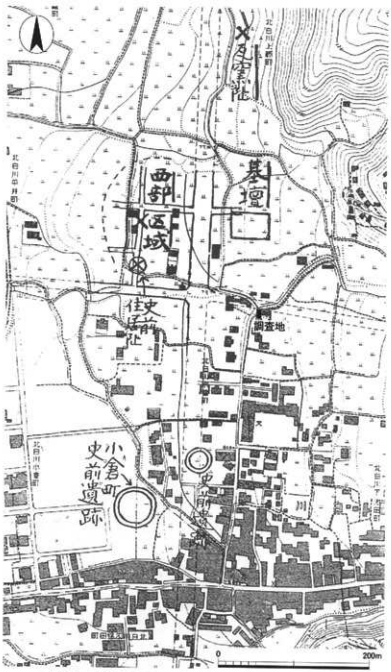


図12　昭和初め頃の調査地とその周辺（1：5,000）
（註2の図版1を調製）

北白川廃寺跡が立地する場所は、瓜生山の山塊から南西に広がる台地である。この台地は、南西方向に高まりが連続するが、これは尾根筋が平野部に埋没したことで、台地となって残存したものである。この高まりがさらに南西に延長していたことは、琵琶湖疎水の水路が西側に大きく迂回することからもわかる。

図12に示した地形図では、調査地の南南西側に「小倉町史前遺跡」「史前遺跡」の2箇所が二重丸で表示されている。両遺跡は後の「小倉町別当町遺跡」となるものであるが、この遺跡もまた台地の高まりを利用して営まれたことがわかる。

こうした調査地周辺の旧地形は、北白川廃寺が発見された昭和9年当時まだよく保存されていた。北白川廃寺の調査報告書

に図版第１として掲載された地図（三千分の一京都市都市計画地図分載、図12）をみると、[2)]都市計画道路である白川通、御蔭通の計画線が引かれているものの、全体的には大正11年製図による都市計画基本図と大きな違いはみられず、道施設後、急速に宅地化が進んだことがわかる。

御蔭通の計画線と北白川小学校の西端を通る南北道路との交点の南東部が今回の調査地であるが、ここは東西方向の畦道が湾曲し、北東から南西方向の水路もここでＹ字形に交わっている。

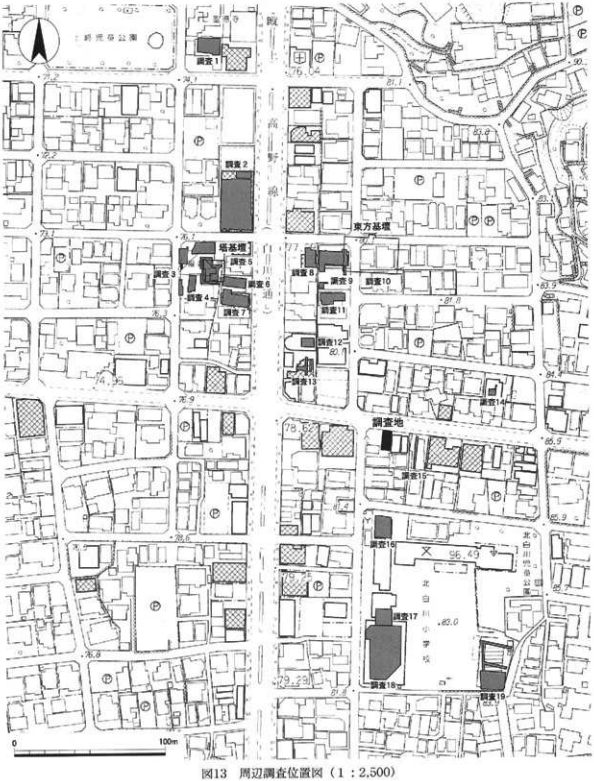



図13　周辺調査位置図（1：2,500）

表3　周辺調査地点一覧表

| 番号 | 所在地 | 期間　面積㎡ | 調査内容 | 文献 |
|---|---|---|---|---|
| 調査1 | 左京区北白川東瀬ノ内町43 | 1981.08.05～1981.08.23 200㎡ | 縄文時代の包含層、奈良時代の柱穴・溝・土壙、平安時代の溝、室町時代の溝・柱穴。 | 『北白川廃寺跡発掘調査概要』昭和56年度　文観局・埋文研 1982年 |
| 調査2 | 左京区北白川山田町1・他 | 1990.12.03～1991.04.09 730㎡ | 縄文時代の竪穴住居・集石・土壙、飛鳥時代の掘立柱建物、奈良～平安時代の東西築垣・溝・土壙・掘立柱建物。 | 『平成2年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　埋文研　1994年 |
| 調査3 | 左京区北白川東瀬ノ内町50-1 | 1995.06.10～1995.09.20 413㎡ | 縄文時代の包含層、飛鳥時代の溝、白鳳時代～平安時代の土壙、塔基壇。 | 『京都市内遺跡発掘調査概報』平成7年度　市民局　1996年 |
| 調査4 | 左京区北白川東瀬ノ内町4 | 1974.10.01～1974.10.20 53㎡ | 塔跡の南西部 | 『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』調査団・文観局　1976年 |
| 調査5 | 左京区北白川東瀬ノ内町4 | 1975.6.28～1975.07.16 150㎡ | 塔跡基壇 | 『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』調査団・文観局　1976年 |
| 調査6 | 左京区北白川東瀬ノ内町4 | 1975.03.25～1975.05.11 90㎡ | 塔跡基壇の南東隅 | 『北白川廃寺塔跡発掘調査報告』調査団・文観局　1976年 |
| 調査7 | 左京区北白川大堂町4 | 1991.07.01～1991.08.05 175㎡ | 奈良時代～平安時代の瓦溜・溝・土壙・柱穴。 | 『平成3年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　埋文研　1997年 |
| 調査8 | 左京区北白川大堂町56 | 1990.07.16～1990.08.17 106㎡ | 縄文時代の包含層、白鳳時代の小鍛冶遺構、白鳳～平安時代の基壇状遺構・溝。 | 『北野廃寺・北白川廃寺発掘調査概報』平成2年度　文観局 1991年 |
| 調査9 | 左京区北白川大堂町55、55-1 | 1980.06.03～1980.07.06 200㎡ | 奈良時代前期（白鳳）の基壇（金堂と西面回廊）、溝、掘立柱建物。 | 『北白川廃寺跡発掘調査概報』昭和55年度　センター・埋文研　1981年 |
| 調査10 | 左京区北白川大堂町 | 1934.11 | 金堂基壇 | 『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』第19冊　京都府 1939年 |
| 調査11 | 左京区北白川大堂町55-1・2 | 2005.11.09～2005.12.08 108㎡ | 飛鳥・奈良時代の西面回廊・南面回廊跡・内溝・東西溝・瓦溜、平安時代の落込み・溝。 | 『京都市内遺跡発掘調査報告』平成17年度　市民局　2006年 |
| 調査12 | 左京区北白川大堂町61-1 | 1987.11.18～1987.11.24 48㎡ | 弥生時代の土壙、平安時代の溝・柵。 | 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和62年度　1988年 |
| 調査13 | 左京区北白川大堂町62 | 1999.10.14 43㎡ | 白鳳期の溝、近世の溝。 | 『京都市内遺跡試掘調査概報』平成11年度　市民局　2000年 |
| 調査14 | 左京区北白川上別当町18・大堂町47-3 | 1986.06.04～1986.06.05 50㎡ | 白鳳期の溝、平安時代の溝。 | 『京都市内遺跡試掘立会調査概報』昭和61年度　文観局・埋文研　1987年 |
| 調査15 | 左京区北白川上別当町29.25 | 1996.08.02 21㎡ | 焼土を含む土壙。 | 『京都市内遺跡試掘調査概報』平成8年度　文観局　1997年 |
| 調査16 | 左京区北白川上別当町10　北白川小学校 | 1982.03.01～1982.04.17 150㎡ | 縄文時代の包含層・河川、7世紀前半の竪穴住居・柱穴・掘立柱建物、近世の溝、柱穴。 | 『昭和56年度　京都市埋蔵文化財調査概要（発掘調査編）』埋文研　1983年 |
| 調査17 | 左京区北白川上別当町70　北白川小学校 | 1984.10.08～1984.10.20 100㎡ | 飛鳥時代の竪穴住居・平地住居の柱穴、落込・溝。 | 『昭和59年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　埋文研　1987年 |
| 調査18 | 左京区北白川別当町70　北白川小学校 | 1994.09.22～1994.12.28 700㎡ | 飛鳥時代の竪穴住居・掘立柱建物・柱列・土壙・柱穴・ピット、平安中期の溝、中世～近世の溝、土壙・ピット。 | 『平成6年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　埋文研　1996年 |
| 調査19 | 左京区北白川上別当町70　北白川小学校 | 1994.11.21～1994.12.16 260㎡ | 古墳時代の溝・包含層、飛鳥・奈良時代の土壙・柱穴、平安中期～鎌倉時代の溝、室町後半の礫、近世の暗渠・土壙・水槽。 | 『平成6年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　埋文研　1996年 |

調査主体：埋文研 → 財団法人京都市埋蔵文化財研究所、センター → 京都市埋蔵文化財調査センター、
文観局 → 京都市文化観光局、市民局 → 京都市文化市民局、調査団 → 北白川廃寺発掘調査団

東西方向の畔道は等高線と平行するため、この畔道は等高線に沿ったものであり、調査地付近が一段低い土地であったことを示すものとみてよい。この点は、調査で検出した落込遺構との関連で注目できるであろう[31]。また、先述した斜め方向の水路の形跡は、調査区の北西部で攪乱として検出したものと方向が一致するため、その一部を検出したと考えてよいであろう。

### (3) 周辺の調査

図13は、北白川廃寺、並びに小倉町別当町遺跡を対象とした調査のうち、主要な発掘調査を示したものである。北白川廃寺では、白川通をはさんで東側に「東方基壇」(推定金堂)、西側に塔基壇が存在するため、それらの周囲で調査が集中している。東方基壇周辺では、基壇の西側で南北方向の回廊基壇を検出しており(調査9)、東方基壇の周囲には回廊がめぐらされていたことが判明している。この西面回廊は、南面回廊に接続することも推定されており(調査11)、回廊に取り囲まれた「金堂院」が形成されていたこと、また回廊自身の南北長も確定されつつある。塔基壇の周辺については、塔基壇の規模は確定できたものの周囲の施設については、調査2で東西方向の柵と溝を検出しており、塔北面には築地塀がめぐることが推定された。

このように北白川廃寺では、「金堂院」と「塔院」が並ぶ構成をしていたことが推定され、また使用瓦の違いから、両者の時期差や笵の系統の違いなども判明しつつある。北白川廃寺の伽藍は、白鳳寺院としては規模が大きく、金堂自身も規模が大きいことが指摘されてきたが、これらは東西に段差がある地形に立地したため、上方に「金堂院」、下方に「塔院」を配置したものと思われる。

小倉町別当町遺跡では、北白川小学校の校内で実施された調査16～調査18で飛鳥時代後半期の竪穴住居や掘立柱建物が検出されており、1982年頃より内容が明らかになった遺跡である。この遺跡が調査されたことによって、北白川廃寺の南方約200mには寺院と同時期の集落が存在したことが判明した。このような、寺院と集落の共存例は北山背ではよくみられる[32]。寺院造営と在地豪族の関係を知る上での好例となっている。今回の調査地は両者の中間に位置するため、両方の関連性を知る意味でも注目される調査であった。

## 2. 遺　構

### (1) 基本層序

調査地での層序は比較的単純な水平堆積がみられた。中央より西側には落込遺構があるため、東壁付近と落込内部に二分して解説する。

**東壁**　上から盛土・旧耕土が0.2m、にぶい黄褐色砂泥(図14の3層)が0.15m、黒褐色泥土(同4層)が0.07mがあり、現地表下0.5m付近で地山とみられる、にぶい黄褐色粗砂(13層)に達する。(3層)は旧耕土、(4層)はそれに伴う床土とみられる。(4層)下には灰黄褐色泥土

（5層）が堆積する。この層は、地山と考えた（13層）を掘り込むピット遺構の埋土でもある。（5層）の底部は不定形な凹凸を呈するため、ピット遺構は人工的な遺構ではなく、植生などによる地層の攪乱と判断できた。

地山については、白川砂を主体とするもの（13層）と想定したが、この層も、色調に汚れを含むことや粘質分を含むことから、植生などの影響を受けた層と思われた。（13層）下に堆積する褐色粗砂（14層）は、明るい色調の白川粗砂であり、明確に地山と判断できる層であった。

**落込遺構**　X=-107,292での南壁断面（図15のC－C）、並びにX=-107,287付近での南壁断面（図15のD－D'）を掲載した。

D－D'断面図から先に説明する。ここでは、（1・3・4層）は東壁と同じ層序であったが、（1層）下には暗褐色砂泥（2層）がみられた。（2層）は（1層）の床土とみられる。落込遺構の内部では、上部に黒褐色泥砂（6層）、黒色砂泥（7層）が堆積していた。この2層は、東肩部にはみられないこと、固く締まること、飛鳥時代後半期（7世紀後半）の土師器・須恵器・瓦を含むことから、人為的に整地された土層と判断できた。（7層）下には黒色泥砂（8層）が厚さ約0.5m程あり、これより下は東側から流れ込んで堆積した層と判断できた。東肩に沿って堆積した暗褐色泥砂（11層）は、明黄褐色粗砂～細砂（10層）の下方に潜り込んでおり、このことはボーリングステッキによる調査からも確認できた。この結果、東肩は急激に下がっていたものと思われる。

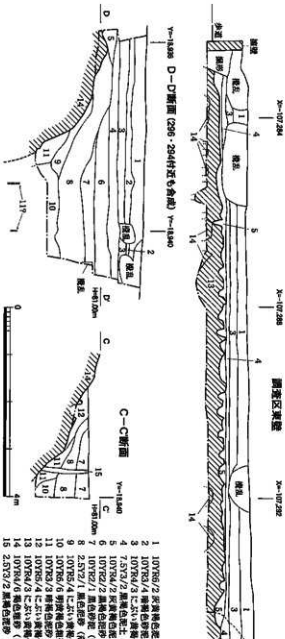


図14　調査区断面図（1：80）

（10層）は粗砂～細砂が等級化して堆積した層で、水流によって運ばれたとみてよい層であった。なお、このD－D'断面図は、当初設定した調査区の南壁断面（X=-107,296付近）と、約3m狭めた際の調査区南壁断面（X=-107,294付近）も含めて作成したものである。

C－C'断面図では、（7・8・10・11層）など先述した断面に共通する層がみられた。しかし

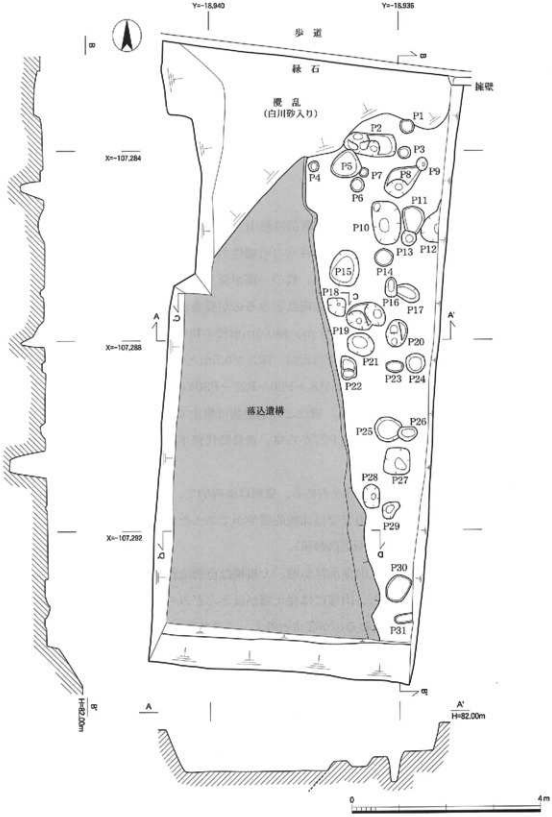



図15　遺構実測図（1：80）

異なるものとして、にぶい黄褐色泥砂（15層）が垂直に立ち上がることが確認された。これが、木の根による攪乱であるのか、地層のひび割れで生じたものか、噴砂の痕跡であるのか、断定できないが、平面での広がりは確認できなかった。

表4　遺構概要表

| 時　代 | 遺　構 | 備　考 |
|---|---|---|
| 飛鳥時代（7世紀後半） | 落込遺構 | 飛鳥時代に整地、底は未確認 |
| 近代以後？ | ピット群 | 不定形な小土壙 |

## （2）遺構

**ピット群**　調査区の東半、落込遺構の東肩部は地山上面となる。この面で不定形の落込みを30基程検出した。小規模な土壙か、あるいは柱穴の可能性も考慮して掘り下げたが、遺構の輪郭が不定形であること、壁面に凹凸があること、底の一部が深くなることなどから、人為的に掘り込まれた遺構ではなく植生などによる地層の攪乱とみるのが妥当と判断し、遺構名も「ピット」とした。規模・形状は、大きいもので長さ1m、幅0.5m前後の楕円形、小さいもので径0.25mの円形で、P2・P8・P10・P19・P20・P27などは、深さが0.5mとやや深い穴であった。

一列に並ぶように見えるものがあり、P8－P20－P27－P30の列、P4－P18－P22－P28の列、P11－P20－P25の列などが指摘できる。柵などの構造物は想定すべきでないと考えるが、参考として表記しておく。P8・P10・P19・P27からは、飛鳥時代後半期（7世紀後半）に属する土師器や須恵器が出土した。

**落込遺構**　調査地の中央から西半分を占める。東肩は直線的で、N9°Wの方位をもつ。東肩の傾斜角度は、検出面から約1m付近までは比較的緩やかであったが、それ以下は急激に落ち込むことが予想される（図14のD－D'断面図参照）。

この遺構の性格としては、人工的な流路か堀、大規模な自然流路、池・沼などの肩部などを想定したが、肩が直線的であること、内部には泥土層がほとんどみられないこと、底が深いことなどから、自然地形に生じた段差とみるのが妥当と考え、この名称を用いた。

**北西部の攪乱**　調査地の北西端には攪乱があり、内部は白川砂で埋められていた。攪乱の南東肩の方位はN40°Eである。地形が北西側に一段下がっていたため、平坦にする目的で北西側が埋められたと推定できる。昭和初め頃の1/3,000地図（図12）をみると、調査地の北東側には斜め方向の水路が描かれているが、この水路と攪乱の南東肩の方向が一致するため、検出した攪乱は水路の一部であったと思われる。

# 3．遺　物

遺物整理箱で2箱分の遺物が出土した。大半は落込遺構からの出土である。落込遺構の内部では、図14の（6・7層）から出土したが、それより下の層から遺物は出土していない。

## （1）縄文土器・弥生土器（図16、図版3－4）

10点ほど出土した。砂粒を多く含む胎土をもつが、小片であるため時期や器形は明確にできない。その中で、弥生時代前期の壷と推定される破片があり、図16に拓影を示した（1）。器種・器形が判別できたのはこの1片のみである。また（3）は上端が突帯状を呈する。（6）は茶褐色を呈し、内部には角閃石とみられ粒子が含まれる。（5）のみP19、残り5片は落込遺構から出土した。

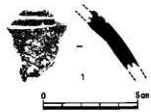



図16　弥生土器拓影・実測図（1：2）

## （2）飛鳥時代後半期の土器（図17、図版3－1・3－3）

土師器（7～15・34～41）と須恵器（16～33）があり、7世紀後半に属する。

土師器には杯、甕（7～12）・鍋（13）・甑（15）などがある。甕が最も多い。（7・8）のみ口径が復元できた。（7）は口径10.8cm、（8）は口径21.4cmある。（9～12）では口縁部の断面形を示した。（9・10）は受口状を呈するもので、「山城型」と呼ばれる甕の口縁部である。甕の体部には煤が付着するものが多い。鍋（13）は口径約36cmあり、浅い体部をもつ。外面には煤が厚く付着する。甑（15）は直立する口縁端部の破片である。把手（14）は甕の体部外面に貼り付けられていたものとみられる。

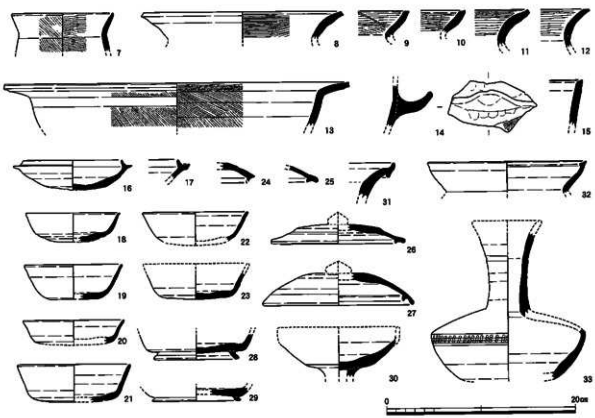



図17　土器実測図（1：4）　落込遺構：7・9・13～20・24・27～29・32・33、他は検出中。

表5　遺物概要表

| 時　代 | 内　容 | コンテナ箱数 | Aランク点数 | Bランク箱数 | Cランク箱数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 縄文時代・弥生時代 | 縄文土器・弥生土器 | 3箱 | 縄文土器・弥生土器6点 | 2箱 | 0箱 |
| 飛鳥時代（7世紀後半） | 土師器、須恵器、瓦類、鉄滓 | | 土師器17点、須恵器18点、平瓦2点、鉄滓3点 | | |
| 平安時代 | 土師器、軒平瓦、丸瓦、平瓦 | | 軒平瓦1点、平瓦1点 | | |
| 合　計 | | 3箱 | 48点（1箱） | 2箱 | 0箱 |

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より1箱多くなっている。

なお土師器の中には、精良な胎土で製作され、外面にはヘラミガキ、内面には暗文を施した個体が20片ほど含まれる（図版3－3）。大半は「杯C」と呼ばれるものであるが、(37) は口縁端部の形状から皿とみられる。(40・41) は高台が付く器形である。(34・36・37・39) は落込遺構、(38・40・41) はその上部掘削時、(35) はP27から出土した。

須恵器には、杯（16～23・28・29）・杯蓋（24～27）・高杯（30）・甕（31・32）・長頸壺(33) などがある。杯では、飛鳥時代以後に製作される杯（「杯G」とする。18～23）が最も多く、次いで杯G底部に高台を貼り付けた杯（「杯B」とする。28・29）がみられる。古墳時代の系譜を引く杯（「杯H」とする。16・17）も少量含まれる。杯蓋では、(24) は杯Gに伴う蓋、(25～27) は杯Bに伴う蓋とみられる。頂部につまみを有する器形であるが、すべて頂上部は欠損している。杯H・杯Gの底部はヘラキリのままであるが、蓋（24～27）の天井部はヘラケズリで調整している。(30) は無蓋高杯で、杯Hの蓋を逆転させて杯部とし、底に短い脚を付けた器形である。(33) は長頸壺で、口頸部と肩部の破片から復元した。底部は欠損するが、脚付きであったとみられる。須恵器では甕の体部破片が最も多い。内面に煤が付着するものが1片ある。焼成不良の須恵器も多くあり、近傍の窯で生産された製品がもたらされたものと思われる。その場合、岩倉盆地の須恵器窯で生産された製品であったと想定される。[5]

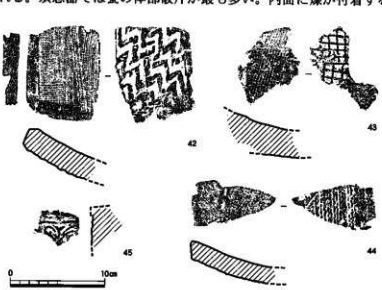


図18　軒平瓦・平瓦拓影・実測図（1：4）

## （3）瓦類（図18、図版3－2）

合計13点と非常に少ない。軒瓦としては、唐草文軒平瓦の小片が1点あり、平安時代

以後の製品と思われる（45）。白鳳期に属する瓦は、平瓦凸面に粗い綾杉文叩きを施すもの[6]（42）、格子叩きを施すもの（43）がある。（44）の平瓦は、凸面に縄叩きを施し、平安時代以後に属する。（42）は落込遺構、（43）は上部から掘り込まれた土壙、（44・45）は落込遺構を整地した層から出土した。

（4）鉄滓（図版3－5）

落込遺構から、小鍛治に伴う鉄滓（46～48）が合計9点出土した。総重量は約700ｇある。

## 4．まとめ

調査地は北白川廃寺跡と小倉町別当町遺跡の中間に位置する。このため、両遺跡の広がりを知る上で調査成果が注目された。結果は、西側に下がる段差を検出し、低い側には泥土層が堆積することから、報告ではこれを「落込遺構」とした。

落込遺構の性格については当初、大規模な自然流路や池・沼の肩部、人工的な水路の肩部、自然地形の段差、などを想定したが、肩部が直線的であること、肩の傾斜角度が急峻であることは、大規模な遺構の一部であることを示すものといえる。そう考えると、湿地や池などの自然地形、人工的な水路の可能性は少なく、東から西に下がる旧地形に生じた段差が後世に埋められた遺構の可能性が高いと思われる。落込遺構の埋土には飛鳥時代後半期（7世紀後半）の遺物が含まれており、人為的に整地されたことは明白である。また落込遺構から出土した遺物は、平成6年度に実施した北白川小学校内での調査（図13の調査18）で出土した遺物と共通しており[7]、北白川小学校（小倉町別当町遺跡）側からもたらされたものと思われる。小学校側の地形が高いこと、瓦の出土が非常に少ないことも、この想定を補足するものであろう。

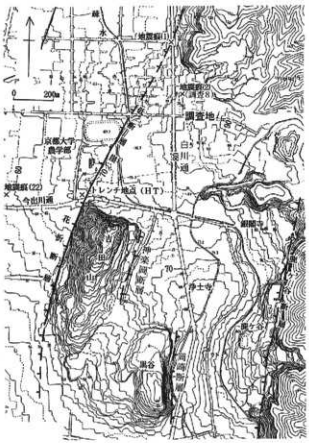


図19　調査地と活断層の位置（註9を調整）

次に、調査地の北側にある御蔭通は山背と近江（湖西）と結ぶ「山中越え」に連続する。御蔭通り自身は昭和初めの都市計画で開設された道路であるが、7世紀後半に大津宮が置かれると、山背と近江（湖西）とを往来する場合、北白川廃寺の南門が想定されるこの場所を経由したことは想定してよいであろう。この場合もまた、地形の段差を解消させる要

因であったと思われる。

最後に、落込遺構の性格を調査地周辺の地形・地質環境を含めて考えてみる。平成２年度に実施した北白川廃寺の５次調査（西面回廊の西側、図19の調査８）では、南東から北西に延びる幅１ｍの噴砂跡を検出している[8]。この噴砂は、縄文晩期の遺構面を破壊し北白川廃寺の時期に削平されるため、その間に活動した断層によって生じた噴砂と判断された。また北白川廃寺では金堂院と塔院の間に段差があり、造営当初より段差のある地形を利用した伽藍配置であったことも判明している。そこで、検出した段差は断層の可能性があるのか、この点について考える。調査地周辺では花折断層を筆頭に複数の活断層が知られているが、それらの方位はすべて北で東に振れている[9]。今回検出した段差はＮ９°Ｗであり、方位の違いは明白であるため、今回検出した段差をこれら主断層と同一視することはできない。ただし、主断層の周辺には小規模な断層が付属することも知られており、主断層の上盤に位置する場合は正断層であるとされる。花折断層は右ずれの逆断層で、東側が上盤、西側が下盤となるが、今回検出した段差は、花折断層の東約300ｍに位置し、西側に落ち込む点では正断層の状況を呈するため、主断層に付随する断層であった可能性は捨てきれない[10]。落込遺構の性格については、今後とも検討を重ねたい[11]。

註

1）『京都市内遺跡試掘調査概報　平成８年度』　京都市文化観光局　1997年。P39No.60として所収。図13では調査15とした。

2）梅原末治「北白川廃寺阯」『京都府史跡名勝天然記念物調査報告』第19冊　京都府　1939年

3）調査地の西側は空き地で約1.2ｍ低いが、かつてここは砂を沈殿させるための池であったという。

4）北山背では集落遺跡と白鳳寺院跡が近接する例として以下が知られる。北野廃寺と北野遺跡、広隆寺と広隆寺旧境内遺跡、出雲寺跡と相国寺旧境内遺跡、大宅廃寺と大宅遺跡。

5）該当するものとして、木野墓窯、栗栖野５号窯出土品がある。『岩倉古窯跡群』　京都大学考古学研究会　1992年

6）平瓦凸面の叩き目をＡ・Ｂ・Ｃの３種類に分類したうちの、Ｂ「Ｗ字形刻線」に該当する。北田栄造「６号窯出土瓦について」『栗栖野瓦窯跡発掘調査概報　昭和60年度』　京都市文化観光局・財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1986年

7）長戸満男「小倉町別当町遺跡」『平成６年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1996年

8）網　伸也「北白川廃寺第６次調査」『北野廃寺・北白川廃寺発掘調査概報　平成２年度』　京都市文化観光局　1991年

9）『京都の活断層　第２版』　京都市　2002年　P54の図Ⅱ-16では、花折断層低段丘崖はＮ28°Ｅ、神楽岡断層はＮ16°Ｅ、岡崎断層はＮ４°Ｅ、鹿ヶ谷断層はＮ11°Ｅと計測される。

10）落込遺構の肩には暗褐色泥砂（図14の11層）が堆積するが、これは斜面に隙間が生じた際に堆積した層と理解できる。

11）地形・地質については、石田志朗氏、ならびに財団法人向日市埋蔵文化財センター中塚良氏よりご教示をいただいた。

# Ⅲ　鳥羽離宮跡151次調査

## 1．調査経過

今回の調査は、京都市伏見区中島秋ノ山町78の共同住宅建設に伴い実施した鳥羽離宮跡151次調査である。調査対象地は都市計画道路７．７．110羽束師墨染線の北側に接している。この道路建設に伴い数次にわたり発掘調査および上下水道布設に伴う立会調査を実施しており、その結果、当該地付近は鳥羽離宮内の北殿にあたり、調査地の東側で勝光明院に推定できる建物基壇、園池の存在が明らかになっており、当調査地では建物基壇の東西の規模を確定する事を目的に調査を実施した。

計画建物の面積は東西13.6m、南北7.6mであったが、北側の隣家との境界部分は遺構面が深くなることが予想されたため控えを広く取り、南北12.5mで調査区を設定した。調査の進捗に伴い、東側を南北2.4m、東西4.3m拡張した。

調査は平成18年10月16日調査器材を搬入。翌17日から調査を実施し、11月１日埋め戻しを行い、11月２日には器材を撤収し、すべての作業を終了した。

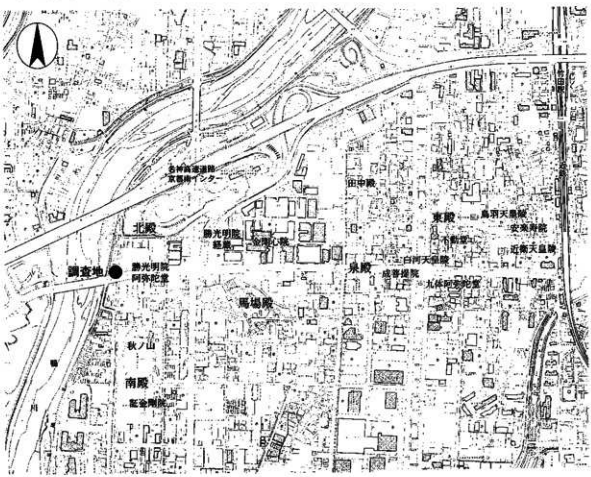



図20　鳥羽離宮跡推定図（1：10,000）

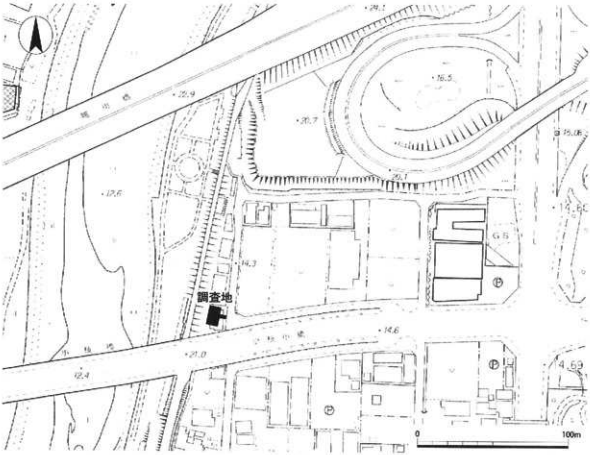



図21　調査位置図（1：2,500）

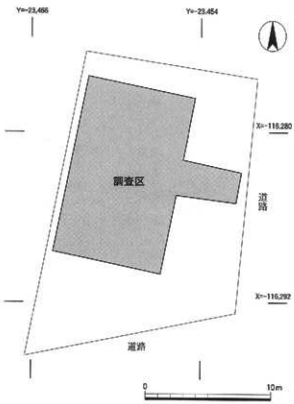



図22　調査区配置図（1：300）

図23　調査前全景

図24　作業風景

## 2．遺　構

### （1）基本層序

調査区の基本層序は、調査直前まであった住宅の整地層が15cm、耕作土が10cmの厚さで堆積し、以下に氾濫堆積とみられる砂礫と粘質土の混土層が約1.2mの厚さで堆積する。その下に池埋土とみられる暗緑灰色粘土層が50～80cmほど堆積する。

なお、調査地の一部で、最下層の暗緑灰色粘土、その上層の灰黄色砂質粘土と、地山層である灰褐色砂礫の不整合な箇所があり、地震による液状化とみられる。

遺構は耕作土を除去した面で礎石建物などを検出した。

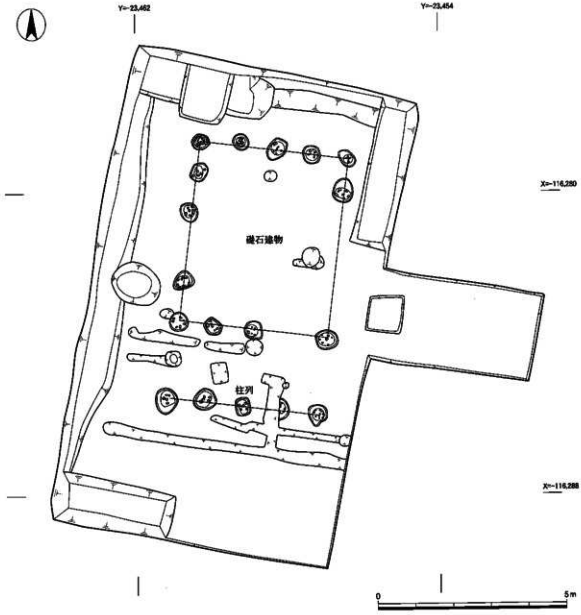



図25　第１面遺構平面図（１：100）

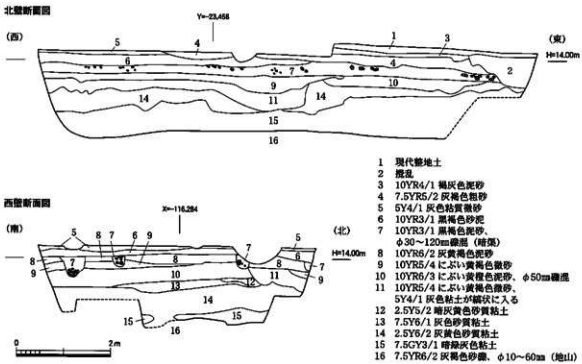



図26　北壁・西壁断面図（1：80）

## （2）遺構

耕作土直下の灰色粗砂～粘質微砂層の上面で検出した。礎石建物と平行する柱列がある。また、最下層で園池に伴うとみられる池の埋土を検出した。

**礎石建物**　南北４間×東西４間の建物。柱間間隔は0.8～1.2mと非常に短い。掘形は0.5mほどで、すべての柱穴に拳大の礫を敷き詰めている。

**柱列**　礎石建物の南側2.0mの位置で平行して検出した。柱間間隔、掘形の規模も礎石建物と同じである。

**氾濫堆積層**　断面図の４層から14層までの砂礫と粘質土の混土層。江戸時代後半の染付などが出土している。

**池状遺構**　地山面までの深さが深くなることが予想されたため、調査区中央部に南北６ｍのサブトレンチを設定して調査を実施した。断面図の15層暗緑灰色粘土層が近隣の調査で検出した勝光明院に伴う園池の堆積土とみられる。洲浜・景石などは検出していない。

表６　遺物概要表

| 時　代 | 内　　容 | コンテナ箱数 | Ａランク点数 | Ｂランク箱数 | Ｃランク箱数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平安時代 | 平瓦 | | | | |
| 江戸時代 | 染付、焼締陶器、施釉陶器 | | | | |
| 合　計 | | １箱 | ０点（０箱） | ０箱 | １箱 |

## 3．遺　物

遺物はコンテナで１箱出土した。大半が氾濫堆積とみられる砂礫と粘質土の混土層からの出土である。近世の染付、焼締陶器、施釉陶器などがあるが、すべて小破片で図化できる遺物はない。

池埋土の暗緑灰色粘土層からは平安時代のものと思われる平瓦の小片が４点出土している。

## 4．ま と め

検出した礎石建物・柱列は、江戸時代後半に位置付けられる。

調査地周辺では数度にわたり発掘調査が行われ鳥羽離宮北殿の様相が明らかになりつつある。特に調査地の東側で行われた118次[1]・143次[2]調査により勝光明院阿弥陀堂とみられる基壇、園池、中島などのより詳細な様子が明らかとなっている。118次調査では池に面した建物基壇の南東コーナー部を検出しており、今次調査により北西のコーナー部の検出が期待できた。結果は基壇を検出することはできなかったが、池底の標高が143次調査の汀の標高とほぼ同レベルであり、阿弥陀堂の西側にも園池が回り込んでいることが明らかとなった。

註

1）　鈴木久男・前田義明「鳥羽離宮跡第118次調査」『昭和60年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　1988年

2）　南　孝雄・尾藤徳行「鳥羽離宮跡143次調査」『平成12年度　京都市埋蔵文化財調査概要』　財団法人京都市埋蔵文化財研究所　2003年

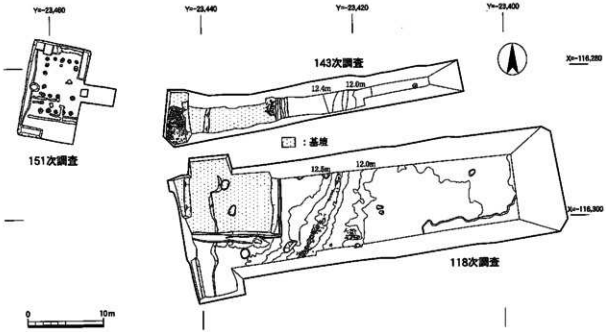



図27　基壇建物と今回の調査地（１：500）

# Ⅳ　山科本願寺南殿跡

## 1．調査経過

### （1）調査の経緯

調査地は、京都市山科区音羽伊勢宿町26－6に所在し、敷地面積664㎡を測る。ここに分譲の個人住宅建設が計画された。調査地を含む一帯は、山科本願寺南殿跡に比定されている。このことから、京都市文化市民局文化財保護課による試掘調査が実施され、室町時代後期の南殿期とみられる遺構・遺物が検出された。

これらの遺構の保存協議のため、その内容をさらに明確にする必要が生じ、本格的な発掘調査が実施される運びとなった。調査は、京都市の国庫補助事業として財団法人京都市埋蔵文化財研究所に委託され、これを受けた研究所が2006年６月19日から同年７月13日の期間に実施した。調査の結果、室町時代後期の遺構・遺物、江戸時代の遺構・遺物を検出した。

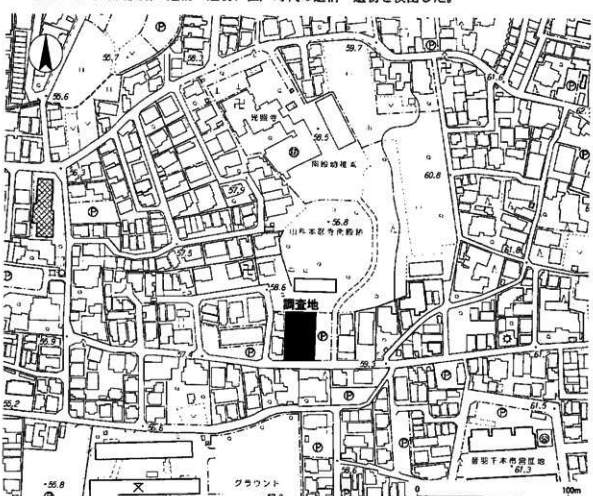



図28　調査位置図（１：2,500）

## （2）位置と環境

調査地の山科区音羽伊勢宿町は京都市の東辺、山科盆地の東北部に位置する。

山科盆地は北側を比叡山系の如意ヶ嶽に、西を東山連峰、東を滋賀県境となる醍醐山地に囲まれている。山地は主として古生層から成り、山地の裾部に洪積段丘が張り出し、各谷筋に沿って沖積段丘と小扇状地が形作られている。盆地の中央部を南流する山科川は西方の東山山麓からの旧安祥寺川、北方からの安祥寺川、四ノ宮川、東方からの音羽川を合わせて、醍醐、六地蔵から旧巨椋池に流れ込み、宇治川、木津川、賀茂川、桂川と合流して淀川となり大阪湾に流れ下っている。この音羽川と四ノ宮川が合流する東方一帯が音羽地区である。音羽地区は四ノ宮川と音羽川による扇状地が複合して作られており、やや高燥な微高地となっている。

周辺の遺跡についてみてみると、山科川と旧安祥寺川が合流する北方の丘陵地にある中臣遺跡では有舌尖頭器が出土、旧石器時代の終わりから縄文時代草創期にかけての遺物とみられている。中臣遺跡はこの他に弥生時代後期から古墳時代前期、古墳時代後期から飛鳥時代、平安時代から鎌倉時代の遺構が発見されている。四ノ宮の東北山麓には芝町遺跡があり縄文時代、弥生時代、奈良時代の遺物が出土している。四ノ宮川の西方、ＪＲ山科駅前一帯には安朱遺跡があり、縄文時代の土器

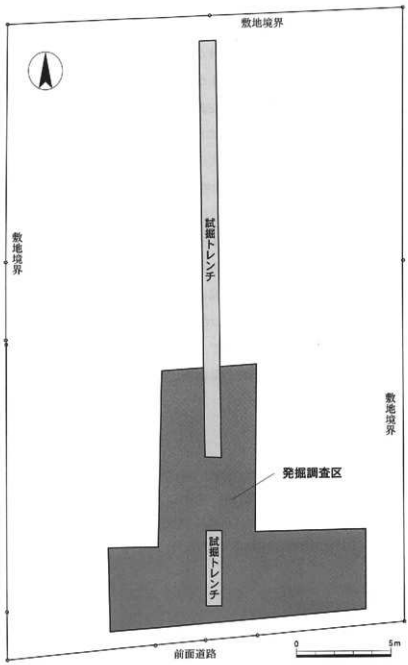



図29　調査区配置図（1：200）

図30　調査前全景（北西から）

図31　作業風景（西から）

棺墓、飛鳥時代の竪穴住居、平安時代の木槨墓、平安時代から鎌倉時代の建物が検出されている。音羽川の上流の小山には大塚遺跡があり、奈良時代から平安時代前期の竪穴住居、掘立柱建物が検出され、鞴羽口、スラグ、焼土が出土し、製鉄に関係した遺跡とみられている。安祥寺川と四ノ宮川の合流する西岸地点には左義長町遺跡があり、弥生時代から古墳時代前期の竪穴住居、土壙が検出されている。行者ヶ森の西南麓には大宅遺跡があり、縄文時代後期から晩期の甕棺墓、土壙が発見されており、古墳時代の竪穴住居、掘立柱建物が確認されている。上層は大宅廃寺跡に比定されており、４棟の大型建物跡が南北に並んで検出されている。

山科本願寺については、応仁の乱がほぼ収束する文明10年（1478）に造営が開始される。寺地は安祥寺川と四ノ宮川、音羽川の三川合流地の西側で、３年後の文明13年（1481）までには寝殿、御影堂、阿弥陀堂が完成し、四方に土塁と濠を構えた本寺とその周囲に町屋や宿坊が配された寺内町が形成され、さらにこの周囲にも土塁や壕が設けられていた。蓮如は生前に本願寺留守職を実如に譲り、音羽川と四ノ宮川の合流点の東方に南殿を造営して隠居した。南殿は内郭が方二町、土塁と濠を備え、外郭が方四町で土塁で囲まれていた。この後、天文元年（1532）に至って、山科本願寺は戦乱に巻き込まれ、全山焼亡の事態を迎えている。この時、南殿も攻撃を受けて共に焼亡している。


参考資料

京都市『京都の歴史３』近世の胎動　(株)学芸書林　1968年

京都市『史料京都の歴史』第11巻　山科区　(株)平凡社　1988年

横山卓雄『平安遷都と鴨川つけかえ』 法政出版(株)　1988年

『京都市遺跡地図台帳』 京都市文化市民局　2003年


## （３）既往の調査

昭和30年（1955）に光照寺南側にある南殿庭園遺構の起伏する草地、疎林、竹藪について地形測量が、奈良国立文化財研究所によって実施されている。

山科本願寺南殿跡の発掘調査は平成14年（2003）に住宅建設に伴う調査が音羽伊勢宿町38－１

他で実施されている[1]。調査地は光照寺の東側で、南殿跡内郭の東北コーナー地区であった。調査では南殿期とみられる土塁、塀、暗渠、建物、溝、土壙などが検出されている。特に、調査で検出した溝８が、古絵図「御在世山水御亭図」（光照寺所蔵）に描かれた遺溝と位置的に合致しており、絵図表記の信頼性を高めた結果となるなどの重要な成果が得られている。

註

1）　出口　勲「山科本願寺南殿跡」『京都市内遺跡発掘調査概報』平成14年度　京都市文化市民局　2003年

参考資料

『京都府史蹟勝地調査会報告』第七冊　京都府　1926年

「中世庭園文化史」『奈良国立文化財研究所学報』第６冊　奈良国立文化財研究所　1955年

## ２．遺　　構

### （１）基本層序

調査区北半は約１m、南半は約0.3mの旧住宅に伴う盛土が見受けられる。この下層に褐灰色の耕作土が0.1m前後の層厚で調査区全面に広がる。耕作土層の下層には黒褐色泥砂が厚さ約0.2mで堆積する。この下層ははにぶい黄褐色土、褐色土が平均0.3m、0.4mの層厚で続く。第１面の江戸時代の溝は耕作土の下面、黒褐色泥砂層に切り込んで成立し、南殿期の遺構は黒褐色泥砂層の下面、にぶい黄褐色土層を切り込んで成立している。にぶい黄褐色土と褐色土は一連のもので、土色の変化は暫時的である。土層中には拳大の礫の混入がみられ、河川による扇状地性の堆積層

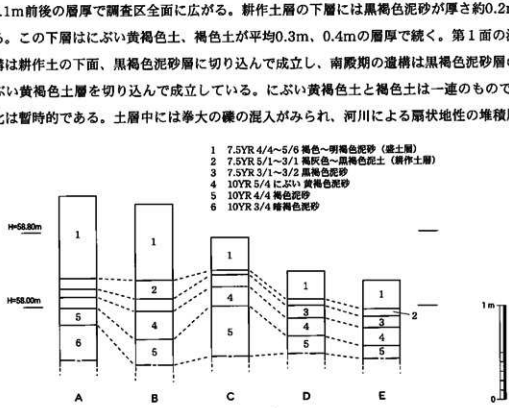



図32　基本層位図（１：40）

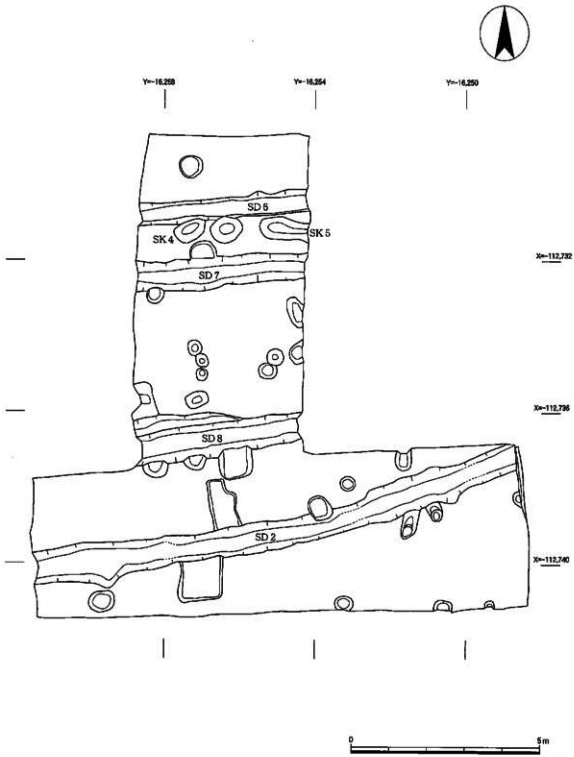



図33　第１面遺構平面図（１：100）

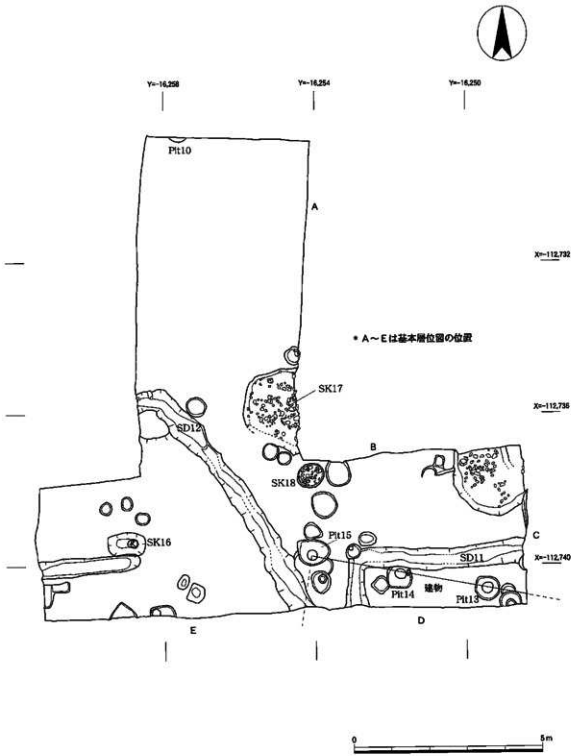



図34　第２面遺構平面図（１：100）

とみてとれる。調査区の四面を黒褐色泥砂層下0.8m前後まで断ち割り、断面観察を実施したが、遺構・遺物は検出されていない。

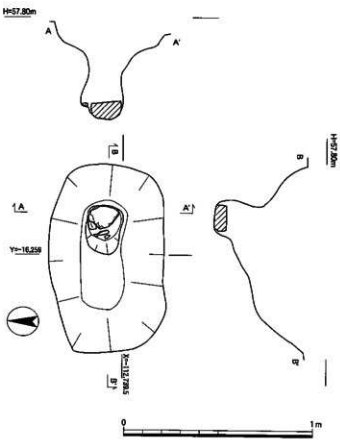
## （2）検出遺構

第２面で室町時代後期（戦国）の溝２条、建物１棟、土壙３基、柱穴多数を検出した。

溝はSD11・12がある。SD11は幅0.6m、深さ0.6mを測る。東から延びて南方向に屈曲する。SD12は幅0.6m、深さ0.7mで、調査区中央、南から北西に延び、調査区西端付近で西に曲がる。いずれも、茶褐色に変色した堆積土が下層に確認できる。

Pit13～15は建物を構成する柱穴とみているもので、Pit15が南方向に広がる建物の北西コーナーと推定している。各柱穴の掘形はほぼ円形で、径0.7m、深さ0.3m、中央に径0.2m前後の柱あたりが確認できる。

土壙SK16（図35）は調査区西側で検出した。東西1.0m、南北0.6mの隅丸長方形で、土壙の中央が長円形に落ち窪む。その東寄り下部に上面平坦な方形の石が据えられる。石は径18cm、厚さ７cmを測る。土壙の形状から、径が20cm前後の柱材を横位状態で長円形の窪みに落とし込み、下端の石材で固定して直立させた遺構と推測できる。土壙SK17は調査区中央で検出した。平面形は径２mの円形で、深さは0.2mを測り、拳大の川原石を疎らに敷く。土壙SK18は径0.8mの円形で、深さは0.15mを測り、拳大の川原石を密に敷きつめる。礎石が失われた根石土壙の可能性がある。




他に多数の柱穴とみられる遺構が検出されているが、建物としてまとまるものではない。

第１面では江戸時代以降とみられる溝４条、土壙２基を検出した。

溝SD２は調査区の南側に検出した。幅0.8m、深さ0.3mを測り、東から西南方向に振れて流下する。溝SD８は調査区中央で、東西方向に検出した。幅0.8m、深さ0.3mを測る。溝SD６と溝SD７は調査区北側に検出した。それぞれ幅0.6m、0.8m、深さ0.3m、0.2mを測る。いずれも東から西に流下する。

# 3．遺　物

## （1）遺物の概要

出土した遺物には、弥生土器壺・甕、須恵器甕、土師器皿、土師質土器甕、須恵質陶器甕、瓦質土器鉢、施釉陶器椀、明染付椀、青磁椀、鉄片、炭片、国産磁器椀などがある。

## （2）出土遺物（図36）

弥生土器片は調査区の黒褐色泥砂層中や南殿期の土壙から５点が出土した。（7）は壺とみられるもので、肩部外面に２条の併行沈線がみられる。

（1）は土師質土器鉢片、（2）は須恵質陶器甕片で黒褐色泥砂層に混入して出土した。ローリング痕跡が認められる。

土師器皿（6）は室町時代後期（戦国）のもので、黒褐色泥砂層の掘り下げ中に出土した。15世紀後半に時期比定できる。同じく掘り下げ中に出土した土器類には須恵質陶器甕、瓦質土器鉢片（5）、施釉陶器椀片（4）などがある。土壙SK16からは炭片と土師質土器甕の小片が出土している。明染付椀（8）は第２面検出のPit10から出土したもので、底部と高台部分が遺存する。高台外面に青花による二重の圏線を描いている。青磁椀（3）は外面に細長い蓮弁を陽刻する。

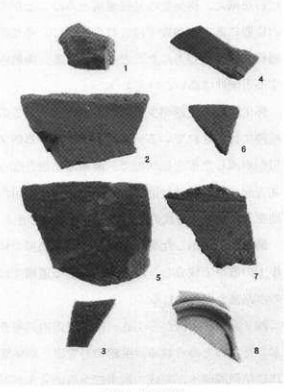


図36　出土遺物

表7　遺物概要表

| 時　代 | 内　容 | コンテナ箱数 | Aランク点数 | Bランク箱数 | Cランク箱数 |
|---|---|---|---|---|---|
| 弥生時代 | 弥生土器 | | 弥生土器１点 | | |
| 室町時代 | 土師器、土師質土器、瓦質土器、須恵質陶器、施釉陶器、青磁、明染付 | | 土師器１点、土師質土器１点、瓦質土器１点、須恵質陶器１点、施釉陶器１点、青磁１点、明染付１点 | | |
| 江戸時代 | 土師器、陶器、施釉陶器 | | | | |
| 合　計 | | ２箱 | ８点（１箱） | ０箱 | １箱 |

※　コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より１箱多くなっている。

## 4. まとめ

調査地は、山科本願寺南殿跡の外郭の一部で、内郭の南門に近接した位置であった。南殿跡に相当する第２面で検出した遺構には、建物や溝がある。建物と同時期とみられる土壙SK16は底部に石を据え、構築物の基礎遺構とみることができる。これは建物の北側ラインの延長で、約５ｍの位置にある。調査ではこれらの他に、多くの柱穴や根石状土壙などが検出されており、建物の補修・建替えがあったことを窺わせる。南殿内郭の前面には、同様の遺構がかなりの密度で展開する可能性は高いといえよう。

弥生時代の土器が少量ながら出土した。この土器片には磨滅痕跡はほとんど認められない。南殿跡に比定されている一帯は、西南流する四ノ宮川と西流する音羽川に挟まれており、両方の河川が形成した複合扇状地で、高燥な土地となっている。南殿跡の地区がその西南端にあたり、東北方向の若宮神社付近まで延びる。四ノ宮川沿いの低地を生産地に利用して、この高燥地に居住地を営んだ弥生時代の遺跡の存在を指摘できよう。

第１面で検出した溝４条はいずれも地形の傾斜に沿って東北方向から西南方向に流下する。耕作土の直下で成立し、江戸時代を遡る遺構ではない。江戸時代を通じた下流側へ供給する農業用の水路跡と捉えられる。

四ノ宮川の上流から引き、南殿跡の内郭堀を利用、この東南隅付近から取水して西南方向へ導水したものとみられる。供給の不安定さが頻繁な溝の造り替えを必要としたといえる。明治20年代に琵琶湖疏水が完成、取水口からの分水が可能になったことで、用水の供給が安定し、上記溝群の役目が終わったとみてとれよう。

なお、今回の発掘調査の成果を受け、当該地の遺構面は基本的に保存できるよう、工事掘削深を浅くすることで事業主との合意が得られ、埋設管によるやむを得ない掘削についても、主要遺構を避ける配慮を得た。末筆ながら記して謝意を示したい。

# 報 告 書 抄 録

| | |
|---|---|
| ふりがな | きょうとしないいせきはっくつちょうさほうこく |
| 書名 | 京都市内遺跡発掘調査報告　平成18年度 |
| 副書名 | |
| 巻次 | |
| シリーズ名 | |
| シリーズ番号 | |
| 編著者名 | 吉嶋　伸・丸川義広・菅田　薫・平田　豊 |
| 編集機関 | 財団法人　京都市埋蔵文化財研究所 |
| 所在地 | 〒602-8435　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1　TEL 075-415-0521 |
| 発行機関 | 京都市文化市民局 |
| 所在地 | 〒604-0925　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488　TEL 075-222-3108 |
| 発行年月日 | 西暦2007年3月31日 |

| 所収遺跡名（よりがな） | 所在地（よりがな） | コード 市町村 | コード 遺跡番号 | 北緯 | 東経 | 調査期間 | 調査面積 | 調査原因 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| 平安宮朝堂院跡（へいあんきゅうちょうどいんあと） | 京都市上京区下立売通千本東入下る中務町491-55、竹屋町通千本東入主税町1145-1（きょうとしかみぎょうくしたりうりどおりせんぼんひがしいるなかつかさちょう、たけやちょうどおりせんぼんひがしいるちからちょう） | 26100 | | 35度01分05秒 | 135度44分36秒 | 2006/2/3～2/15 | 58㎡ | 小規模共同住宅建設 |
| 北白川廃寺跡（きたしらかわはいじあと） | 京都市左京区北白川上別当町26-1（きょうとしさきょうくきたしらかわかみべっとうちょう） | 26100 | 397 | 35度01分58秒 | 135度47分33秒 | 2006/6/19～7/6 | 73㎡ | 住居兼共同住宅建設 |
| 鳥羽離宮跡（とばりきゅうあと）（151次調査） | 京都市伏見区中島秋ノ山町78（きょうとしふしみくなかじまあきのやまちょう） | 26100 | 1166 | 34度57分06秒 | 135度44分34秒 | 2006/10/16～11/2 | 100㎡ | 小規模共同住宅建設 |
| 山科本願寺南殿跡（やましなほんがんじなんでんあと） | 京都市山科区音羽伊勢宿町26-6（きょうとしやましなくおとわいせじくちょう） | 26100 | 629 | 34度59分01秒 | 135度49分19秒 | 2006/6/19～7/13 | 113㎡ | 範囲確認 |

| 所収遺跡名 | 種別 | 主な時代 | 主な遺構 | 主な遺物 | 特記事項 |
|---|---|---|---|---|---|
| 平安宮朝堂院跡 | 都城跡 | 平安時代 | 溝状遺構、落込み | 土師器、須恵器、瓦 | 朝堂院北面回廊基壇の北端を検出 |
| 北白川廃寺跡 | 寺院跡 | 奈良時代前期 | 落込遺構 | 土師器、須恵器、瓦 | 西側が一段低い地形を検出 |
| 鳥羽離宮跡（151次調査） | 離宮跡 | 江戸時代後半 | 礎石建物、柱列 | 染付、焼締陶器、施釉陶器 | 阿弥陀堂西側で園池を検出 |
| 山科本願寺南殿跡 | 邸宅跡 | 室町時代後期 | 溝、建物、土壙 | 土師器、土師質土器、瓦質土器、須恵質陶器、青磁、明染付 | 山科本願寺南殿跡の外郭地区で建物、溝を検出 |

# 図　版

図版1　平安宮朝堂院跡　遺構

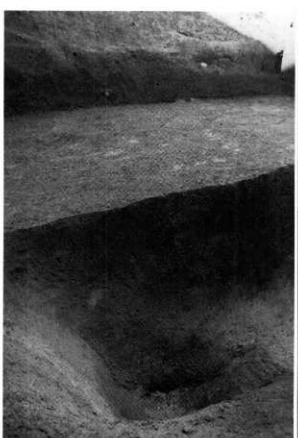
1　調査区全景（北から）

2　SX４検出状況（南東から）

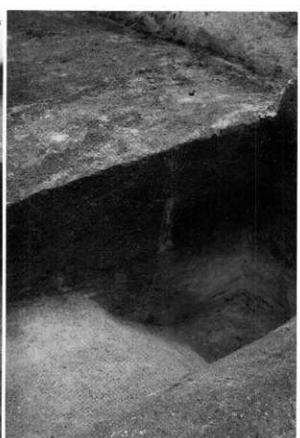
3　砂礫層除去後の状況（北から）

図版2　北白川廃寺跡　遺構

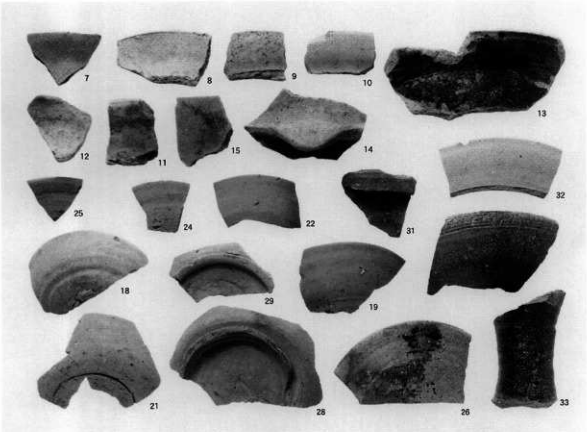
1　全景（北から）



2　D－D′断面（北東から）

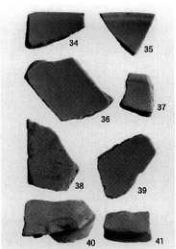


3　C－C′断面（北東から）

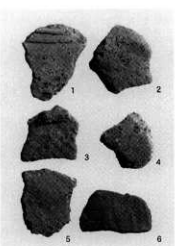



1　土器

2　瓦




3　土師器（暗文入）




4　縄文土器・弥生土器

5　鉄滓

1　第1面全景（北東から）

2　第2面全景（南西から）

1　第1面全景（北西から）

2　第2面全景（北西から）

図版6　山科本願寺南殿跡　遺構

1　建物跡（北西から）

2　土壙SK16（南から）

京都市内遺跡発掘調査報告
平成18年度

発行日　2007年3月31日
発　行　京都市文化市民局
住　所　京都市中京区寺町通御池上る上本能寺前町488
編　集　(財)京都市埋蔵文化財研究所
住　所　京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265-1
〒602-8435　℡ 075-415-0521
http://www.kyoto-arc.or.jp/
印　刷　三星商事印刷株式会社